

平成二十二年度年史企画展

「関大ルネッサンス」―岩崎卯一没後五〇年記念展―の記録

安田盛拳

はじめに

年史資料展示室では、ここ数年、新年度に本学の歴史にゆかりのあるテーマで企画展を開催している。

平成二十二年度（二〇一〇）は、戦争の混乱がまだ収まらない昭和二十二年（一九四七）、関西大学の出身者として初めて学長に就任した岩崎卯一に焦点をあてた企画展「関大ルネッサンス―岩崎卯一没後五〇年記念展―」を実施した。岩崎は学長に就任して間もなく、「関大ルネッサンス」「関大アカデミア」「ハイト関大」といったメッセージを送り、敗戦によって物心ともに荒廃している学生たちに勇気と希望と情熱を与えた。

開催期間は平成二十一年（二〇〇九）四月一日から平成二十二年（二〇一〇）三月末日まで。土曜、日曜、祝日および大学が定める休日は閉館したが、校友会のスプリングフェスティバルや教育後援会総会、オープンキャンパスなどの行事開催日には開館した。

今回の展示の構成・内容などを振り返り、のちの記録として留めたい。

一 岩崎卯一

展示のことをしるす前に、簡単に岩崎卯一の経歴にふれる。

岩崎卯一（一八九一―一九六〇）は佐賀県杵島郡武雄



企画展ポスター

町に生まれた。実業家をめざした時期もあったが、法曹界での立身を決意し、大正二年（一九一三）九月、関西大学専門部法律学科第二学年に編入後、特待生に遇され、在学中に弁護士試験に合格し、大正四年（一九一五）七月に本学を卒業した。その後、関西大学で数多くの「第一号」となり、本学の歴史にその名をとどめることになる。

大正四年（一九一五）十二月、関西大学が初めて海外

に送り出した留学生としてアメリカのコロンビア大学でドクター・オブ・フィロソフィーの学位を取得して帰国後、大正十年（一九二二）八月、本学初の専任教授に就任する。さらには昭和九年（一九三四）四月から初代法文学部長、昭和十三年（一九三八）九月から初代図書館長などを務め、昭和二十二年（一九四七）五月には関西大学出身者として初めて学長に公選される。また、昭和三〇年（一九五五）一二月には初の公選校友会長ともなった。

学生の育成にあたっては、正課・課外の区別なく情熱を注ぎ、学生たちから絶大な人気を集めた。学長に就任後、間もなく、相次いで「関大ルネッサンス」「関大アカデミア」「ハイト関大」を発信している。

二 展示の内容

年史資料展示室内の企画展示室には、大型の縦型展示ケース一基と写真パネル展示台が備えられている。それ以外に、壁面を利用して解説パネルを設置するのも例年の展示方法となっている。

壁面写真パネル

展示の順路としては、最初に「ごあいさつ」、さらに「関大ルネッサンス―岩崎卯一とその時代」というタイトルの大型の展示パネルを壁面に設置し、岩崎卯一が関西大学で果たした功績と、人となりをもつて四つの観点に分けて説明し、略年表を付けた。それぞれの解説はつぎのとおりである。

①解説 多くの「第一号」

岩崎卯一は一時、実業家をめざして旅順夜学校に入學したが、法曹界での立身を決意し、叔父の紹介で神戸警察署に勤め、英語通訳事務などを行った。大正二年九月、本学専門部法律学科に入學後、特待生に遇され、在學中に弁護士試験に合格し、大正四年本學を卒業した。

その後、①本學第一回海外派遣留學生として渡米（大正四年十二月）②帰国後本學初の専任教授に就任（大正十年八月。創立してから三十四年間、本學には専任教授がいなかった）③初代法文學部長（昭和九年四月）④初代図書館長（昭和十三年九月）⑤本學出身者として初の公選學長（一回目 昭和二十二年五月）。以後、昭和二十

八年、昭和三十一年にも選出され、都合三期を務めた⑥公選された初の校友會會長（昭和三十年十二月）という多くの「第一号」になり、関西大学の歴史上に、その名を残している。

(1)写真 コロンビア大学のドクターコースで恩師ギディングス教授を囲んで

(2)写真 自身の論文原稿をゆっくりと読み上げて講義をする岩崎教授

②解説 學生に人氣の教授

岩崎の講義は、アメリカで修得した最先端の知識に裏打ちされ、非常に斬新で面白く、その評判は隣りに學生たちの間に広まった。教室はたえず満員で、本来の履修學生が締め出されるほどの盛況ぶりであった。

岩崎は、人心を捉えるキャッチフレーズづくりの名人でもあった。「外へ目を向けよ」と説く「関大ルネッサンス」。「身も心も内へ沈潜させよ」という「関大アカデミア」。「大学の質的向上に努力するべく、志を上へ向けよ」と唱える「ハイト関大」は、戦後の荒廢から立ち直ろうとする學生たちに希望と情熱を与えた。また、本學創立

者の一人、児島惟謙に焦点をあて、「正義を権力より護れ」という言葉で建学の精神を端的に表した。

さらに岩崎は、学生の弁論部（雄弁会）や野球部の部長として、部の育成、発展にも努めた。弁論会では熱弁をふるい、多くの聴衆を魅了した。また、野球部はアメリカ（昭和五年）、ハワイ（昭和八年）、さらには第二次ハワイ（昭和十一年）などの海外遠征を行っているが、岩崎は大正十五年夏休みの朝鮮遠征に同行している。これらの遠征は、関大野球部の実力を強く印象づけるものであった。岩崎は、正課のみならず、課外活動においても学生たちの育成に力を尽くしたのである。

- (1)写真 国家論を講義する岩崎教授
- (2)写真 朝鮮半島・旧満州に遠征した野球部員とともに
に京城駅前にて（大正十五年）

③解説 学園大家族主義

岩崎が学長に就任（昭和二十二年五月）した頃は、戦後の復興、知の復興に向けて、学生のみならず、学園もまた、再建のために新たな指標を必要としていた。岩崎が「学生諸君に告ぐ」と題したメッセージで「関大ルネ

ッサンス」を提言したのは、まさにそうしたときであった。

岩崎が提唱した「関大ルネッサンス」とは、関西大学の長い伝統の中で育まれた真理究明の真髓を再発見することであり、そのためには、どのような種類の困難とも闘う熱意と勇気を持たねばならないと説くものであった。

昭和二十二年八月、大学は理事、教職員、校友会、教育後援会、学生で構成する学校協議会を発足させ、学園の諸問題を民主的に協議する体制作りを行った。これは全国の大学のさきがけとなるものであった。

そして岩崎が学長に就任して程なく開かれた学校協議会では、授業料値上げが議題の中心となった。学生たちの大学経営に対する批判は厳しかったが、そのとき岩崎は「学校は制度としてゲゼルシャフト（利益社会）であるが、精神と運営においてはゲマインシャフト（共同社会）でなければならぬ」という「学園大家族主義」を提唱した。この提言に共鳴した父兄たちは、学園の発展のために、協力を惜しまないとの考えを表明した。また、法人も財政状態を隠すことなく公表した。その結果、法

人の提案する授業料増徴案は学生たちの認めるところとなった。岩崎の「学園大家族主義」が大学の運営をスムーズに進める契機になったと言えよう。

(1)写真 弁論部の総会（昭和二十五年）

(2)写真 法学部法律学科の卒業記念写真（昭和二十四

年）

④解説 校友会への貢献

昭和八年、校友会常議員に選出された岩崎は、校友会の組織確立に取り組んだ。それまで学部、専門部一部、同二部のOB組織は、それぞれ独自の活動を行っていたが、岩崎は三者の大同団結を提唱。自ら規約改正委員を引き受け、校友会会則の改正に取り組んだ。その結果、昭和十三年二月十四日の校友総会で改正案は承認され、一つに統一された校友会組織が実現したのである。

さらに昭和二十二年、学長になってからの岩崎は、いち早く校友課を設置し、敗戦による混乱を收拾することに努力した。こういったこともあり、昭和三十年に校友会がはじめて公選の会長を選出した時、岩崎は初代会長に選ばれた。校友会発展のために、母校出身者で、なお

かつ将来の発展を託すべき人材として、校友の衆望を岩崎が担っていたと言えるであろう。岩崎はまたその期待に応え、堂々たる会長ぶりを示したのである。

(1)写真 大同団結が成った校友会総会（昭和十三年）

(2)写真 校友会旭支部総会で挨拶をする岩崎学長

⑤略年譜

こうした解説パネル以外に、壁面には、展示ケースを挟んで、向かって右側には「関大ルネッサンス」「関大アカデミア」「ハイト関大」、左側には「岩崎卯一先生誕生100年記念祭」の解説パネルをそれぞれ展示した。このうち、「関大ルネッサンス」「関大アカデミア」「ハイト関大」の解説パネルには次の解説を加えた。

解説「関大ルネッサンス」「関大アカデミア」「ハイト関大」
・「関大ルネッサンス」

昭和二十二年（一九四七）五月、学長に選出された岩崎は、就任にあたって「学生諸君に告ぐ」と題する原稿を『関西大学新聞』に掲載し、学園建設の抱負を語った。

岩崎が提唱した「関大ルネッサンス」とは「真理究明

の真髄を新たに再発見するものであり、真理の探求に命をかける者は、どのような困難とも闘う熱意と勇気を持たなければならぬ」と説くものであった。岩崎のこのメッセージは、敗戦によって物心ともに荒廃している学生たちに勇気と希望を与えた。

(1)写真 岩崎学長が「関大ルネッサンス」を説いた「学
生諸君に告ぐ」

・「関大アカデミア」

翌二十三年（一九四八）の新制大学入学式で岩崎は「学徒の使命は真理の探求である。それには、対象と一定の距離を置いて眺める余裕と忍耐力を持つことが必要である。現象にとらわれず、背後にひそむ本質の問題をとらえ、静かに研究し、批判せよ」と説いた。

そして文化祭や大学祭でも「深い思索と広い視野をもって関大アカデミアを築こう。世界観に裏付けられた確固とした信念に基づいて理論を立て、文化協同体を作り出してほしい」と訴えた。

(2)写真 大学祭で「関大アカデミア」を呼びかける岩

崎学長（昭和二十三年十月）

・「ハイト関大」

昭和二十四年（一九四九）春、学長就任三年目を迎えた岩崎は、大学にとって大きな課題の一つとなっていた大学院設置構想を「ハイト関大」のスローガンに込め、学生たち呼びかけた。「関大ルネッサンス」で目を外へ向けよ、「関大アカデミア」で身も心も内へ深く沈潜せよと説いてきた岩崎は、「ハイト関大」で志を上へ向けよ、大学の質的向上に努力しようと呼びかけたのである。

(3)写真 戦後の学舎建設第一号となった大学院学舎

もう一つの解説パネルである「岩崎卯一先生生誕一〇〇年記念祭」の解説は次のとおりである。

解説「岩崎卯一先生生誕一〇〇年記念祭」

明治二十四年（一八九一）年十一月十日に佐賀県杵島郡武雄町で誕生し、昭和三十五年（一九六〇）六月八日に享年六十八歳で亡くなった岩崎卯一は、存命であれば平成三年（一九九一）に生誕一〇〇年を迎えることになる。そこで岩崎を慕う弟子や関係者が集まり、生誕一〇〇年の記念祭を執り行うべく実行委員会を立ち上げ、「記

念祭の開催」と「追悼文集の発行」という二大事業に取り組んだ。

生誕一〇〇年記念祭は平成三年（一九九二）十一月十



「岩崎卯一先生生誕100年記念祭」解説パネル

日に関西大学一〇〇周年記念会館で挙行された。第一部「記念式典」、第二部「岩崎先生を想う」、第三部「懇親会」で構成され、特に第二部では、上林良一法学部教授が「岩崎社会学の人と文献」と題する講演と「岩崎卯一先生の聲音」と銘打つスライド上映を行った。記念祭には三百人が出席し、在りし日の恩師の面影を偲んだ。また、この日発行された追悼文集『岩崎卯一先生を想う』には一〇三人が、それぞれ思い出の記を寄せた。

教え子の一人である稲野治兵衛（当時関西大学理事長）は、来賓を代表して「岩崎先生は早くから国際化、情報化の大切さを訴えた先駆者でした。大学の充実に努めた功績は関西大学の歴史に永久に残ります」と挨拶した。

- (1)写真 生誕一〇〇年記念祭式次第
- (2)写真 生誕一〇〇年記念祭
- (3)写真 生誕一〇〇年を記念して作られたケーキ
- (4)写真 挨拶を述べる稲野治兵衛理事長
- (5)写真 三〇〇人が出席した記念祭

展示ケース内展示品

① 顔写真 岩崎卯一

② 写真 佐賀県立武雄高校（三枚）

昭和二十九年（一九五四）、岩崎は佐賀県立武雄高校の大石平校長に頼まれて同校の校歌を作詞した。「あしたのうべに仰ぎみる みふねの山の気高さよ」で始まる歌詞に阿保寛大阪学芸大学教授が曲をつけて完成した校歌は、同年九月二十二日の校歌・校旗制定発表会で披露された。高校からは作詞の謝礼が岩崎に贈られたが、これを同校に寄付したため、岩崎賞という奨学資金が設けられとい



佐賀県立武雄高校

うエピソードが残っている。

(1) 写真（三枚）

- 岩崎が校歌を作詞した佐賀県立武雄高校
 - 体育館に掲げられている校歌扁額
 - 校歌にうたわれた御船山
- ③ 久井忠雄専務理事宛書簡



久井忠雄専務理事宛書簡

昭和三十五年（一九六〇）五月十六日付で久井専務理事宛に送られた書簡。

この中で岩崎は「関西大学は小生にとってはその総てであり この学園に何の不自由もなく また何の不満もなく 全生涯を捧げ得たこと無上の光栄とし また喜びとして居ります これからの関西大学の運命は 時に消長のみられることがあるかも知れませんが 私は関西大学の萬歳を信じて居ります」と述べている。

また、最初の段落で「他日荆妻が小生の意志についての関西大学への関連につき 御相談申し上げる機もあるかとも存じ……」というのは、京都長岡の自宅を寄贈することについて後日の相談を請うものである。

④ 甲子園ボウル優勝記念のバックル

昭和二十三年（一九四八）、アメリカンフットボール部が第二回甲子園ボウルで優勝し、大学日本一になったことを祝し、岩崎学長が部員たちに贈ったもの（羽間平安氏提供）



甲子園ボウル優勝記念のバックル

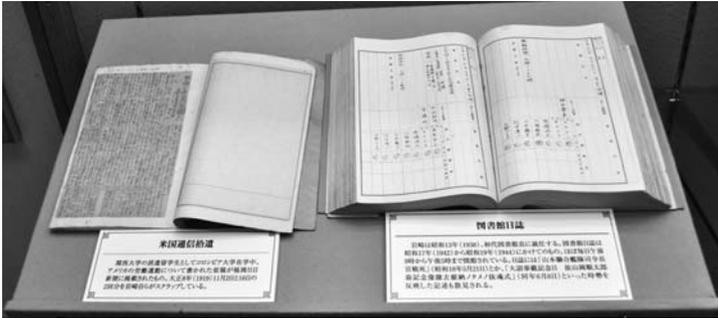
⑤ 図書館日誌

岩崎は昭和十三年（一九三八）、初代図書館長に就任する。図書館日誌は昭和十七年（一九四二）から昭和十九年（一九四四）にかけてのもの。ほぼ毎日午前九時から午後五時まで開館されている。日誌には「山本聯合艦隊司令長官戦死」（昭和十八年五月二十一日）とか、「大詔

奉戴記念日 故山岡
順太郎翁記念像撤去
献納ノタメノ抜魂
式」（同年六月八日）
といった時勢を反映
した記述も散見され
る。

⑥米国通信拾遺

関西大学の派遣留
学生としてコロンビ
ア大学在学中、アメ
リカの労働運動につ
いて書かれた原稿が
福岡日日新聞に掲載
されたもの。大正八
年（一九一九）十一
月二日と十六日の二
回分を岩崎自らがス
クラブしている。



『米国通信拾遺』『図書館日誌』

⑦岩崎卯一の著作

岩崎社会学は、京都大学の高田社会学、関西学院の小
松社会学とともに関西の三大秀峰と称された。

⑧『現代国家学説』の原稿と著書

『現代国家学説』は昭和三十四年（一九五九）に自費出



岩崎卯一の著作『現代国家学説』の原稿と著書

版された。岩崎はマス目の小さい専用の原稿用紙に極細のペン先を使用して執筆、それに朱を入れながら推敲していった。関西大学図書館にはこうした原稿以外に、岩崎が原稿執筆の進捗状況を自ら管理したノートも残されている。岩崎の几帳面な性格が窺える資料である。(原稿は関西大学図書館所蔵。サイン入り著書は北川均氏提供)

⑨岩崎卯一先生生誕一〇〇年記念祭



実行委員会に贈られた感謝状、記念祭参加者芳名録など、岩崎卯一先生生誕100年記念祭に発行された『岩崎卯一先生を想う』

⑩記念祭参加者芳名録

稲野治兵衛理事長、大西昭男学長、植垣幸雄校友会長、今井康兼元常務理事などの氏名が記されている。

⑪実行委員会に贈られた感謝状

写真パネル展示

写真パネル展示台には、四面あわせて十八枚の写真パネルが展示できる。今回、この展示は、岩崎の学者としての経歴を「若き日の岩崎先生」「小壮教授・岩崎先生」「学長時代の岩崎先生」の三つに区分し、残り一区分を「素顔の岩崎先生」とし、関連する写真をまとめた。グループごとの写真と、そこに付け加えた解説はつぎのとおりである。

「若き日の岩崎先生」(パネル四点、写真六点)

パネル1

(1)写真 高等小学校補習科時代

明治二十四年(一八九一)十一月十日、岩崎卯之助とエネ子の二男として佐賀県杵島郡武雄町で生まれた岩崎



展示パネル

を決意する。八月、兵庫県内の警察署長を歴任した叔父、岩崎甚七を訪ね、その紹介により兵庫警察語学講習所で通訳の養成を受けた。大正二年（一九一三）、兵庫警察訓練習所を卒業後、同年七月から神戸警察署で英語通訳事務に従事した。

パネル 3

(3)写真 学生時代

(4)写真 第一回留学生としてアメリカへ出発

大正二年（一九一三）一〇月、関西大学専門部法律学科第二学年に編入した岩崎は翌三年、特待生に選ばれた。同年秋、在学中に弁護士試験に合格し、大正四年（一九一五）七月、関西大学を卒業した。同年十二月には、原田鹿太郎とともに本学第一回海外留学生として、横浜発のシカゴ丸でアメリカへ旅立った。

パネル 4

(5)写真 コロンビア大学の恩師 H・F・ギディングス

博士

(6)写真 ドクター・オブ・フィロソフィーの学位を取

得

は、明治三十一年（一八九八）に武雄町立尋常小学校に入學。同三十九年（一九〇六）、武雄町立高等小学校を卒業し、同校補習科に進学した。

パネル 2

(2)写真 神戸警察署に勤めていたころ

岩崎は明治四十四年（一九一一）一月から八月まで佐賀県有数の富豪牟田万次郎の秘書役書生として牟田家に身を寄せた。この間、法律書に親しみ、法曹界での立身

英語と教養科目を履修するためイリノイ州のノックス・

カレッジで一学期を過ごした岩崎は大正五年（一九一六）九月、ニューヨークのコロンビア大学に入学した。翌年七月には大学院マスター課程に進学。大正七年（一九一六）六月にマスター・オブ・アーツの学位を取得したのち、同年九月にドクター課程へ進学した。大学院では、日本でも著名なH・F・ギディングス博士に師事、政治社会学を研究した。そして大正一〇年二月、「The Working Forces in Japanese Politics」の論文でドクター・オブ・フィロソフィーの学位を得た。

「少壮教授・岩崎教授」（パネル五点、七点）

パネル 1

(1)写真 福島学舎で社会政策の授業を行う

大正一〇年（一九二一）七月、アメリカ留学を終えて帰国した岩崎は、八月に関西大学が任命した最初の専任教授として着任した。アメリカで最先端の知識を修得した岩崎の講義は非常に斬新で、内容が多岐に亘っていたため、学生たちからの人気も高かった。

パネル 2

(2)写真 全国高等専門学校野球大会で優勝した野球部
(3)写真 野球部の遠征に同行し関釜連絡船上で撮った記念写真

大正末から昭和初期にかけて野球部は黄金時代を迎え、国内だけでなく、海外にも出かけ試合を行っている。岩崎は野球部長として、しばしば試合や遠征に同行した。写真は、昭和二年（一九二七）に野球部が全国高等専門学校野球大会で優勝したときに東京・神宮外苑青年会館前で撮ったものであるが、この優勝は関大野球部の存在を社会に強く印象づけた。もう一枚は昭和四年（一九二九）八月に朝鮮半島や満州（中国東北地区）へ遠征した際、関釜連絡船ハルビン丸の船上で記念撮影したものの

パネル 3

(4)写真 全国中等学校弁論大会で弁論部長として挨拶
(5)写真 長崎遊説に出席する弁論部

関西大学弁論部は千里山、専門部一部、同二部の三団体が独自に活動していたが、全国弁論大会は三者合同で運営した。昭和十一年（一九三六）六月、中央公会堂で

開かれた全国中等学校弁論大会で岩崎は、弁論部長として挨拶した。また、地方遊説にも同行した。地方の聴衆たちは正義感にあふれる学生弁論に刺激を求め、文化の香りを運ぶものとして関大遊説隊を歓迎した。

パネル 4

(6)写真 研究室にて

「ゲゼルシャフト」「ゲマインシャフト」に代表される岩崎の社会学は当時、京都大学の「高田社会学」、関西学院の「小松社会学」と並び称され、関西に三大秀峰ありと、広く学会の承認するところであったという。

パネル 5

(7)写真 校友会の会合にて

大学昇格に伴い、学部の卒業生により「千里山学士会」が誕生し、さらに専門部も一部と二部に分かれたことから、OB会組織はそれぞれ独自の活動を行うようになっていた。昭和八年（一九三三）、校友会の常議員に選出された岩崎は、三者の大同団結を提唱。自ら規約改正委員を引き受け、校友会会則の抜本的改正に取り組んだ。岩崎案は昭和十三年（一九三八）二月十四日の校友総会に

はかられ可決、改正された。写真は昭和十六年（一九四一）二月十一日に開かれた校友会若屋支部創立総会の日撮られたもの。

「学長時代の岩崎先生」（パネル四点、六点）

パネル 1

(1)写真 大学祭で挨拶する岩崎学長

昭和二十二年（一九四七）十月の大学祭で挨拶する岩崎学長。同年五月、学長に選出された直後、岩崎は『関西大学新聞』に「学生諸君に告ぐ」と題する文章を発表して「関大ルネッサンス」を提唱したが、この大学祭の挨拶でも「学生諸君は関大ルネッサンスの旗手たれ」と檄をとばしたという。

パネル 2

(2)写真 学長室にて

昭和二十二年（一九四七）に公選されて学長に就任した岩崎は、昭和二十八年（一九五三）と昭和三十一年（一九五六）の選挙でも選ばれ、学長職を三期務めた。在任中は学長の重責のほかに多くの公職が加わり多忙を極め

だが、講義も疎かにせず、一〇時間をこえる授業を担当した。

パネル3

(3)写真 三笠宮殿下を案内する

(4)写真 学生たちと話す三笠宮殿下、岩崎学長

昭和三十一年（一九五六）二月二十一日、関西大学で日本オリエント学会関西イストラム部会が開かれ、同会の会長を務める三笠宮殿下が来学、講演をした。このとき殿下は岩崎学長の紹介で、学生と親しく会話を交わした。

パネル4

(5)写真 欧米視察に旅立つ

(6)写真 帰国後、欧米大学事情を講演する

岩崎は昭和三十一年（一九五六）七月から二カ月に亘って欧米諸国を視察した。訪れたところは、アメリカの十四都市をはじめ、十三カ国三十一都市に及んだ。また、帰国後には「欧米から帰って」と題する講演を行い、学生たちにヨーロッパの大学事情を伝えた。

「素顔の岩崎先生」（パネル五点、六点）

パネル1

(1)写真 天竜寺管長関精拙師らとともに

戦前から戦後にかけて嵐山に住んだ岩崎は、天竜寺の関精拙、その嗣関牧翁と親交を深め、精神修養を行うとともに、天竜寺の庭園を愛した。

パネル2

(2)写真 自宅の門柱

(3)写真 自慢の庭を掃除する

千坪に及ぶ広大な庭園を持つ邸宅は岩崎の自慢であった。百姓家風の藁葺きの邸宅に書斎をつくり、庭園には風趣あふれる巨石と樹木を配して楽しんだ。

パネル3

(4)写真 自分の講演のテープを聴く

自分の講演が吹き込まれたテープを聴く岩崎。くつろいだ様子が伺える。

パネル4

(5)写真 神宅賀寿恵理事長とともに自宅の庭園で

昭和三十三年（一九五八）ごろ、神宅賀寿恵理事長を

招き、自宅庭園で記念に撮った写真。岩崎と神宅は大正四年（一九一五）に専門部法律学科を卒業した同期の盟友である。また、神宅のあとに理事長となった三好萬次も同じく同期生であった。

パネル5

(6)写真 令室とともに

昭和三十五年（一九六〇）六月八日、岩崎は六十八歳の生涯を閉じた。関西大学とともに生きた人生であった。故人の遺志により、ヌイ夫人から岩崎の蔵書と住んでいた土地の半分が大学に寄贈された。一周忌を機に贈られた蔵書により、図書館に岩崎記念文庫が設けられた。住宅地はヌイ夫人の死後、相続者の希望もあって売却し、昭和四十九年（一九七四）に建てた大学院学舎建設費の一部に充当された。大学は新築したこの学舎を岩崎記念館と命名し、偉大な功績を称えらるとともに末永く遺徳を顕彰した。

三 企画展を開催して

今回の企画展では、「関大ルネッサンス」「関大アカデ

ミア」「ハイト関大」といったメッセージに、時代を先取りする考えを込めて、学生や教職員を激励した岩崎卯一を展示で紹介した。

見学者に説明を行った折に、反応が大きかったのは、先に紹介した展示ケース内展示品の「甲子園ボウル優勝記念のバックル」であった。平成二十一年（二〇〇九）に本学アメリカンフットボール部が六十二年ぶり二度目の優勝に輝いていたので、親近感を持ってもらうことができたのである。当時の岩崎学長が選手一人ひとりに贈ったものであるが、先生の学生に対する思いやりを今に伝える品と言えよう。

このように、展示品や紹介パネルなどを通して、岩崎先生が本学の発展に貢献した偉業を紹介することが今回の企画展開催の目的であり、多くの来館者に伝える機会になったのは、たいへん喜ばしいことであった。

（やすだ もりたか 年史編纂室）